

## 祭りと土木



本誌特集 p.53「ダム建設工事で行われる祭り」より

つい先日のこと、いつもは人の往来が少なく車の交通量が多い駅に降り立つと、駅前が人で溢れ返り道路には車線規制がかかっていた。何事かと思い、近くの電柱のチラシにふと目をやると近くの神社で「祭り」が実施されるとのこと。そこには色々な屋台が出て、住宅地の静かな佇まいとは異なり、大変な賑わいを見せていた。

かつては宗教的な儀式の一部として機能していた「祭り」は、ある特定の宗派の人だけが参加するものであった。しかし、そういった「閉じた」宗教的儀式としての機能が弱まった現在の「祭り」では、誰もがそこに足を運び、楽しむことができる「開かれた」祭りとなっている(もちろん、儀式的性が濃い、閉ざされた「祭り」も残ってはいるだろう)。民俗学者として有名な柳田国男は、明治期以降とそれ以前「祭り」の大きな変容をまさにそこに見てとり、祭りへの「見物人の増加」こそが「日本の祭り」の相貌を大きく変えた主要因の一つだと指摘している(『日本の祭り』)。

ではこういった「見物人」あってこそその「祭り」となっている現代の祭りにおいて、土木は「祭り」とどのような接点をもっているのだろうか。もちろん「祭り」の会場へと向かうための道や鉄道といった交通網などを整備するということは、本誌をお読み頂いている読者諸氏には容易に想像がつくことであろう。しかし、実はそれだけではない。祭りを実施するために様々な縁の下の力持ちとして土木は機能しているのだ。その事例を今号ではいくつか紹介する。

今号を読むことで、今夏祭りに行かれる読者諸氏が、その祭りを土木が支えているかもしれないということに思いを馳せて頂ければ幸甚である。

# 特集 祭りと土木

## 花火大会と河川 —木曾三川流域での事例—



おおさわ けんじ  
大澤 健治\*

### はじめに

日本での打ち上げ花火は、江戸時代に独自の発達をとげた。花火大会の起源は、大飢饉とコレラ流行による死者の慰霊と悪霊撤退、無病息災を願い、将軍吉宗が行った隅田川での川開き水神祭りの余興と言われている。その後、日本各地に花火大会は広がり、現在では、日本の夏の風物詩として欠かせないものとなっている。花火大会と川の深い繋がり歴史を感じさせるいわれであるが、現在も、川を会場とした花火大会が数多い。

河川の花火大会は、河川改修や水辺整備など地域の労苦を経た高水敷や堤防が会場となることが多い。堤防は、洪水から暮らしを守る重要な構造物であるが、花火大会の時には、観覧場として、出店場として人々の笑顔があ

ふれる空間となる。

時には水害という災いをもたらす「川」であるが、それは古くからその地域の社会、文化、産業に深く関わっている。

「川」での打ち上げ花火は、地元住民にとっては特別な思いの募る大切なイベントである。本稿では木曾三川での花火大会と河川水辺整備との関連事例を紹介する。

### 1. 木曾三川概要と流域の花火大会

木曾三川とは、木曾川、長良川、揖斐川をいい、流域面積9,100km<sup>2</sup>の日本有数の大河川である。中下流部は合流、分流を繰り返して濃尾平野を形成し、宝暦治水、明治改修を経て、現在では三川が分離されている(図-1)。流域のうち、平野部の主流部分を、国(木曾川上流河川事務所、木曾川下流河川事務所)で直轄管理している。

流域各地の川辺で花火大会が行われているが、国管理区間での事例を表-1に示す。そ



図-1 木曾三川流域概要

表-1 国管理区間内での花火大会例

河川名	開催地	名称	1976開催日
木曾川	美濃加茂市	おんねMINO-KAWA 夏祭り	8月6日
	安曇町	おんねMINO-KAWA 夏祭り	7月20日
	大田町	日本ライン夏まつり 湖沼花火大会	8月10日
	江原町	江原川花火大会	10月10日
	豊後町	豊後川まつり	8月15日
	一宮市 幸島町	濃尾水花火	8月14日
長良川	穂積町	全国河川博覧会 中日花火大会	7月30日
	岐阜市	岐阜新聞全国花火大会	8月6日
	穂積町	幸島の夏祭り	8月14日
揖斐川	揖斐川町	いづみ川の花火大会(揖斐川花火大会)	8月7日
	大田町	大田川花火大会	7月30日
	余吾町	余吾水郷花火大会	7月30日
木曾川 大野町	濃尾川花火大会	8月13日	

※大田町、江原町、一宮市、穂積町は豊後川、岐阜市は三重川、それ以外は岐阜県

\*国土交通省 水管理・国土保全局 治水課 堤防構造分析官  
(前:国土交通省 中部地方整備局 木曾川上流河川事務所長)

の他、上流部や支川でも花火大会があるが、当方で集計しただけで25箇所以上、200万人を越える市民が川での納涼を楽しんでいる。

川での花火大会と、河川・水辺整備との関連について、いくつかの事例を紹介する。

## 2. 岐阜市長良川での花火大会

### 2.1 概要

岐阜市長良橋下流の河川敷では7月最終土曜日と8月第1土曜日に、2週続けて大きな花火大会がある。岐阜新聞全国花火大会と全国選抜長良川中日花火大会である。前者は戦後の「復興・岐阜」をテーマに昭和21年から、後者は昭和32年から始まり、それぞれ、昨年で71回、60回を迎えた歴史ある大会である。両花火大会とも3万発の打ち上げ規模で、来場者も40万人という、全国でも屈指の大会である。

### 2.2 河川改修の経緯

打ち上げ会場である長良橋付近は、かつては長良川が北側に派川し、現在の支川伊自良川に合流していた。本川と派川に囲まれた地域で頻発する洪水対策のために、北側の派川部分を締め切り、本川下流部を開削し新堤を建設することとした。工事は昭和11年に着手、昭和19年に完成した。派川部分の改修まで含めると昭和26年までに至る。

これらの整備により河道が安定し高水敷が形成され、現在では両岸の高水敷部分は岐阜市が河川公園として維持管理し、市民の憩いの空間となっている（写真-1）。打ち上げ場所は南側の河川敷で、対岸北側の高水敷、堤防は絶好の観覧場所となる。

また、写真-1の金華橋と忠節橋の南側の区間も、堤防が決壊すると岐阜市中心部から広域に氾濫が及ぶ治水の要の箇所であるが、家屋が川沿いに密集し、堤防補強が困難であった。そこで堤防構造を擁壁構造とし、擁壁上部の直立壁（特殊堤）は、観光都市としての景観に配慮して格子状とし、水位が上昇



写真-1 改修前後の長良川（会場付近）

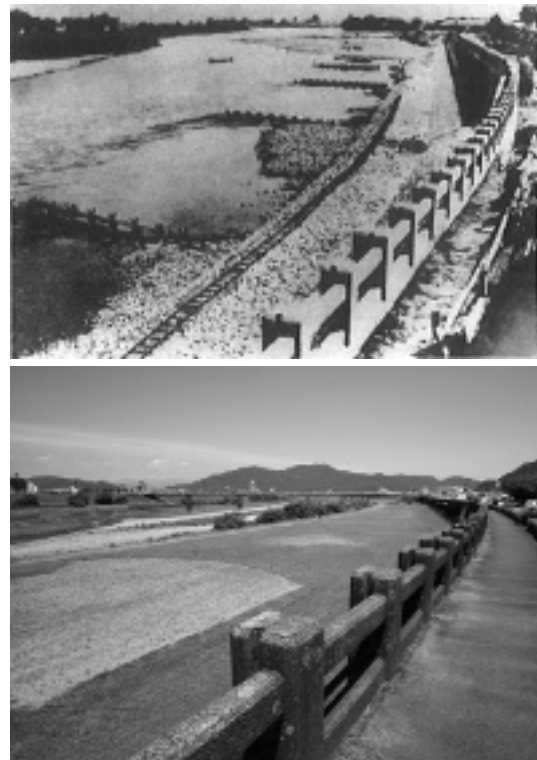


写真-2 長良川忠節橋上流の昼堤、高水敷  
（上：建設当時の状況 下：現在の状況）

した時は昼をはめ込む構造（昼堤）とした。この工事は昭和8年に着手され、昭和24年に完成している（写真-2）。完成当時の写真